619

塔原（とうばる）遺跡

（大島郡天城町兼久字塔原）

位置と環境

天城町は徳之島の西部を占め，塔原遺跡は天城町のやや南側に位置し，天城町の中心部である平土野の南方に約５㎞の，標高約80ｍの海岸台地に立地する。緩やかに西側に傾斜し，西側と南側は数十ｍの琉球石灰岩の断崖となっている。

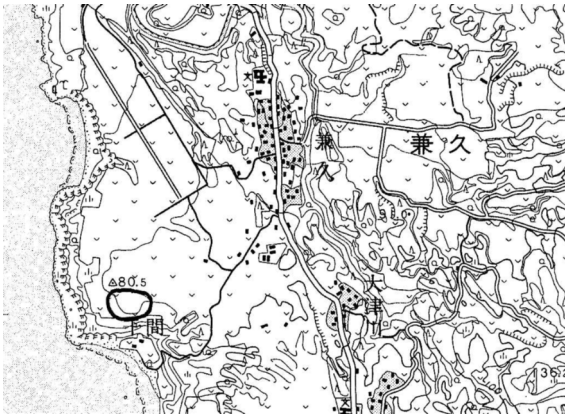
調査の経緯

塔原遺跡は昭和40年代に地元の向井一雄などにより発見された。昭和63年２月，個人の天地返し等で，遺跡が破壊されることを憂慮した兼久郷土史研究会を中心とする地元有志が，文化財保護のために塔原遺跡発掘調査要望書を町当局・町社会教育課に提出した。昭和63年７月には町教育委員会の依頼を受けた熊本大学文学部考古学研究室によって第１回目の塔原遺跡の発掘調査が実施され，天地返しによりかなり削平されているものの，縄文時代晩期相当の住居跡などが検出された。当初土地改良事業の地区外であったこの地域においても，地元の要望で県営畑地帯総合土地改良事業（天城南部地区）の事業計画地区に含めるという計画の変更がなされ，これを受けて，確認調査を平成５年度（1993）から３か年にわたって実施することとなった。確認調査は，天城町教育委員会が調査主体となり，県教育委員会の協力を得て実施した。平成５年度～平成７年度の調査の結果，Ａ地点（約3,200㎡）とＢ地点（約450㎡）とに遺構と遺物包含層の存在を確認し，熊本大学によって調査された部分の付近の範囲（Ｃ地点，約930㎡）に遺構が存在することが判明した（第２図）。

調査面積は，平成５年度は104㎡，平成６年度132㎡，平成７年度は480㎡であった。また，平成８年度には設計変更不可能なＣ地点について発掘調査を行った。

遺構と遺物

平成８年度（1996）のＣ地点の発掘調査は熊本大学が1988年に発掘調査した結果を受けての調査であった。1988年の発掘調査においては竪穴遺構３基と焼土単独の遺構４基が検出されている。今回は熊本大学の調査と併せて，住居跡が６軒，土坑が４基検出された（第３図）。１号土坑は径が約１ｍ，深さ1.5ｍの縄文時代晩期の水溜遺構と考えられる。竪穴住居跡は，残存状況が悪くプランが明確でない。５号住居跡は石囲いの住居跡であろう。遺物は，喜念Ⅰ式・カヤウチバンタ式・宇宿上層式などの土器と，磨製石斧などの石器が出土している。



第１図　塔原遺跡の位置

平成７年度は，確認調査とともにＡ地点の一部トレンチを拡張して，遺構の調査も行った。住居跡は単独に近い，７・８・９・12号住居跡を調査し，切り合い関係と埋土の深さを確認するために，13・15・16号住居跡と18～22号住居跡にそれぞれサブトレンチを設定して掘り下げた。７～９号住居跡の３基の住居跡をほぼ完掘し，ほかの住居跡については，埋土の状況や切り合い関係の把握などを調査して埋め戻した。Ａ地点については，地区除外されて現状保存された（第４図）。

住居跡は粘土層に掘られた竪穴住居跡（第５図）で，７号住居跡は東西約2.9ｍ×南北約2.8ｍの中央に石を巡らした炉を有する住居跡で，炉内には深さ約20㎝ほどの炭化物や焼土が堆積している。炉の周辺は西北方向に焼土や灰の堆積が観察され，それらを炉からかき出したものと判断される。プランは不整形であるが，隅丸方形の住居跡に東西に張り出しがある形と考えられる。壁高は低く，重機による削平は伺われず，他の住居跡とくらべて浅い住居跡といえる。南側隅の柱穴はしっかりしており，周囲に柱穴が巡るものと考えられる。西側の張り出し部分に小柱穴が検出され，出入り口の可能性がある。８

号住居跡は，東西２ｍ×南北2.7ｍの規模の小さい住居跡で，南側寄りに焼土が堆積し，花崗岩や珊瑚礫を南側壁面に配する。花崗岩や珊瑚礫は２次過熱を受けて，表面が黒化したり，ボロボロに風化していた。検出面での壁高は約10㎝～20㎝である。長軸上に２本の主柱穴と考えられる柱穴があり，断面ＣＤで切った柱穴と南側のやや大きい柱穴はそれぞれが向中心性をもって掘り込んである。それらとは別に，小柱穴が壁際に配置される。円錐状の屋根と簡易な壁立ちが推測される。このようにタイプの違う住居跡が検出され，時期差が想定される。

出土土器は宇佐浜式土器から仲原式土器，そして凸帯を巡らす甕形土器を伴うものへと推移する。縄文時代晩期から弥生時代前期に相当する時期を推定している。５号住居跡で磨製石斧（伐採具と加工具）・打製石斧・磨石・敲石・凹石・クガニ石の良好な石器のセットが把握できる。６号住居跡では，これにチャートの剥片石器が加わる。磨製石斧は蛇紋岩や砂岩を，打製石斧は頁岩や粘板岩を石材とする。粘板岩製の石斧については，同じ石材で変成のすすんだより緻密な磨製石斧とは別に，身の薄い打製石斧が，磨製石斧の未製品でなく製品として存在する。石質の差で使い分けたものと判断した。南九州でも頁岩ないし粘板岩の，撥形やラケット形あるいは短冊形の打製石斧は土掘具として扱っており，縄文的な石器であり，畑作との関連が強いものとされる。

特徴

徳之島では，畑地の天地返しが進む中で，埋蔵文化財は危機に瀕している。こうした中で，地元の方々の熱意が，遺跡の現状保存にむすびついた。石器のセット関係が明示された遺跡であり，集落跡として縄文晩期から弥生時代の奄美の歴史を解明するに欠くことのできない遺跡である。また水溜遺構や石器などから，畑作に関係する可能性もある。

遺跡の現状

Ａ地点については，現状保存されている。将来的には買い上げて公園化する構想がある。

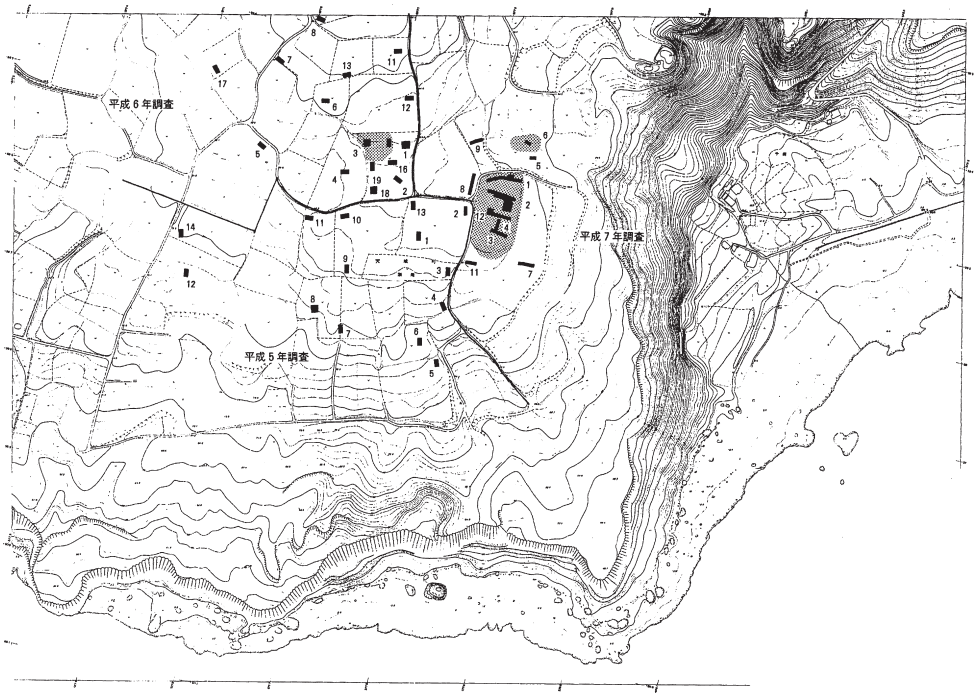
資料の所在

出土遺物は，天城町「ゆいの館」に保管・展示されている。

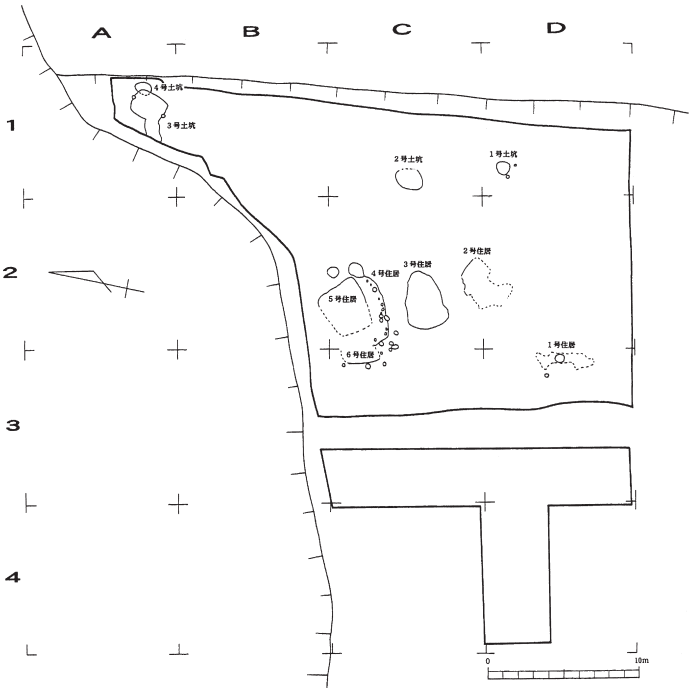
参考文献

天城町教育委員会1999「塔原遺跡（２）」『天城町埋蔵文化財発掘調査報告書』４
熊本大学考古学研究室1988「塔原遺跡」『天城町文化財調査報告』第１集

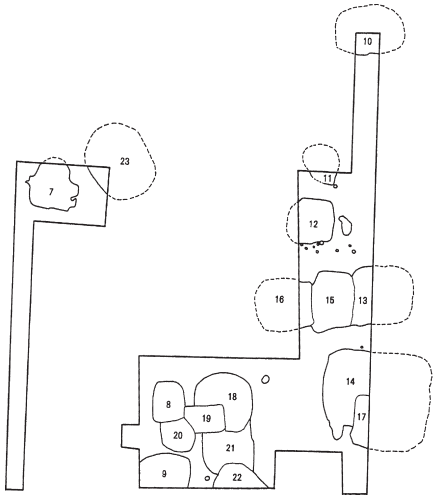
（堂込秀人）



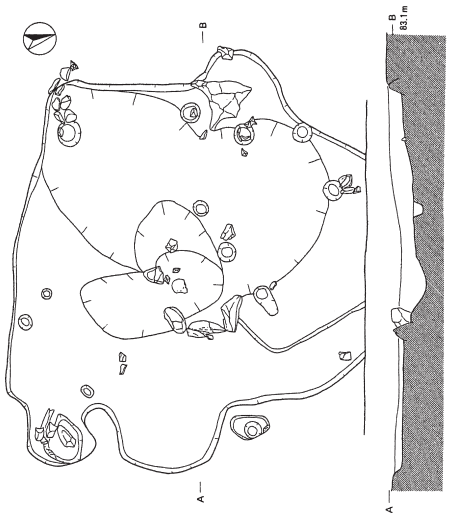
第２図　トレンチ配置図



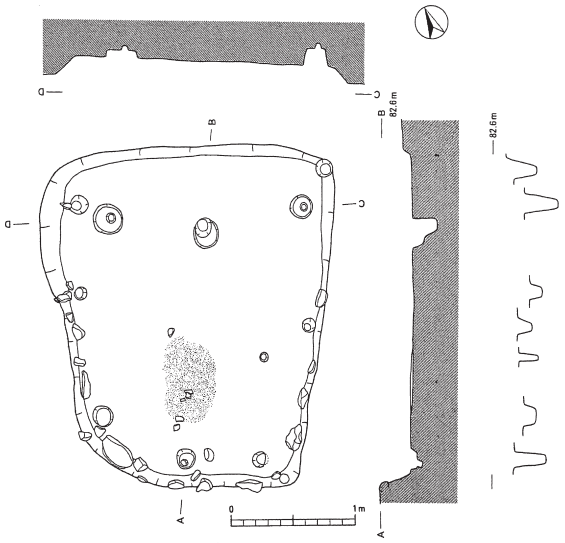
第3図　C地点遺構配置図



第4図　A地点遺構配置図



7号住居跡



8号住居跡

第5図　A地点検出住居跡